

抽齋とその息子たち

根岸隆尾(校長)

私の長年読み親んできた本の一つに、森鷗外の史伝小説『澀江抽齋』がある。抽齋は、幕末に生き、弘前藩津軽家に仕えた医官であり儒者であった。躋寿館の講師(今日の東大医学部教授の職)も勤め、將軍家慶にも謁見し、所謂目見え以上の身分となり、医官としては最高の位まで達した人物である。文学芸術を愛好し、古書の校勘(写本や刊本の異同を探り原本の形を再現させること)に没頭した考証学者でもあった。安政五年(一八五八年)八月、コレラにかかり、五十四歳で没した。

『澀江抽齋』は、ただに抽齋一個の伝ではない。その師友門人等の生涯を列記するかたわら、抽齋の子孫とこれに関係した人物の生死を細叙して、抽齋の死後ほぼ六十年、大正五年の執筆の時にまで至る、いわば、「一定の時代の国民生活の全体の歴史」(岩上順一『歴史小説論』)といえる様相を持った大作品である。

私は今、明治維新という社会の大変動期の前後に青春を送った抽齋の二人の息子に目を向きたい。善かれ悪しかれ、時代に明確な反

応を示すのは若者たちだからである。

(抽齋没後)第十年は明治元年である。伏見、鳥羽の戦を以て始まり、東北地方に押し詰められた佐幕の余力が、春より秋に至る間に漸く衰滅に帰した年である。最後の將軍徳川慶喜が上野寛永寺に入った後に、江戸を引き上げた弘前藩の幾組があった。そして其中に澀江氏があつた。

官軍が江戸城を収め、慶喜が水戸へ隠退した日、四月十一日に、澀江氏の一行は江戸を發した。一行は、戸主茂善十二歳、母五百五十三歳、陸二十二歳、水本十六歳、専六十五歳、矢島優善三十四歳の六人と若党二人であつた。

この元年を境に澀江一家の生活は大きく変転していく。しかし、抽齋在世中にも一つの不辛なる家庭問題を抱えていた。それは、抽齋三人目の妻岡西氏徳出の二男優善(のち優と改名)の放蕩であつた。優善は、十七歳で津軽家医官矢島玄碩の末期養子にさせられた。未来の妻鉄は、当時六歳、重い痘瘡のために満面癩痕、人が見るのを厭う醜貌であつた。抽齋が、門人であつた媒介者の言に動かされ

て、美貌の子優善を鉄に与えたのである。四番目の妻五百は、幼い鉄に添寝してその顔を見ることに、「優善は可愛そうだ」と言つたという。

そつした事情もあつたのか、優善は放蕩のかぎりを尽くした。或る時は、松川飛蝶と名告つて心打として高座に登つたり、船を借りきつて墨田川で影芝居も興業したり、また、吉原にしばしば遊び、借財ができると親戚故旧に償わせ、跡をくらました。三万五千部あつたといわれた抽齋の書物が、没後は一万部になつていたという。抽齋の書を紛失せしめたのは、無論優善一人ではない。しかし、抽齋没後の三年、五百が夫抽齋の遺言に従つて嗣子成善に与つた「日本に僅三部しかない善い版の十三経註疏」さえ、盗み出したのである。こつした不行跡が重なつて、優善は、二十七歳の時、「身不行跡不将」の廉を以つて隠居を命じられたのである。生前抽齋は、優善を幽閉しようと座敷牢まで用意したのであつた。

弘前に着いた優善は、後から妻と葛藤を生じ、雪中、老母や幼い弟妹を置いて、ひとり江戸へ出奔した。一時妓楼の箱屋となつたが、明治三年、先に浦和県に官吏となつていたかつての悪友の薦めで、同県の典獄を振り出しに官吏生活を完うし、多くの親戚朋友の世話をした。新聞に劇評も書き、その分野では開

拓者の一人として算えられるべきだと鷗外をして云わしめているのである。

優善の青春期は、国家的変革の予兆に満ちた不安の時代であった。優善にどんな内面的な鬱屈があったかはわからない。言うまでもなく、社会制度や「家」に対する意識的な叛逆ではなかったであろう。ただ己れの好み、性向に従っただけかもしれない。しかし、その生き方は、自ら封建時代における武家社会の「家」の制度を踏み越えるものがあつた。そして、そうした社会や制度が崩壊し、個人が開放されたとき、彼は、自立した一個の社会人として己れの才能を生かして生を全つしたのである。こつしたことを考えると、彼は、不安な終末の時代を典型的に生きた人物であつたと言えよう。克己の人である父抽斎も、遺樂として劇を観ることを好んだ。鼻眞の役者もいた。またひそかに小説も書いた。優善は父の性向の一面を負う方向へ発現させた人物でもあつたのだ。

一方、二歳にして家督を継いだ成善（後に保と改名）は、青春期に一家を背負つて、時代の混乱した始まりを生きなければならなかつた。成善は、六歳で主な経史の素読を了え、藩主から奨学金を受けた程、書物を好んだ。七歳で中国最古の医書『素問』の講義を受け始めていた。父抽斎の跡を襲うに足る人物であつた。しかし、時代は、成善の人生を一変

させた。明治三年、弘前藩は藩士の秩禄（手当）を大削減した。原禄三百石の澀江氏は三十俵に減額され、その上、医者は、「土籍の外にあり」といわれた。成善はその恥を雪ぐと決意した。

「成善は母を弘前に遣して、単身東京に往くことを決心した。その東京に往かうとするのは、一に降等（家禄の格を下げられたこと）に遭つて不平に堪へなかつたからである。二には減禄の後は旧に依つて生計を立てて行くことが出来ぬからである。その母を弘前に遣すのは、脱藩の疑を避けむがためである。」

明治四年三月、十五歳の成善は母と水杯を交して上京し、共立学舎で英語を学び、同時に大学南校にも籍を置き、更に、日本の教育界を開拓した一人であるオランダ人のフルベツクにも個人的に教えを受けた。克己精進の日々であつた。この年藩を廃して県を置くことになつた。成善は名を保と改め、断髪した。世の中はいよいよ変つたのである。そして、翌五年、保は東京に母を迎えた。しかし、学費に窮した保は、大学に進めず、この年始めて設けられた師範学校の給費生となつた。英語を操り英文を読むことを志していた保の意になかなう科目はなく、一時は退学を考えたが、周囲の状況がそれを許さず、やむなく卒業して浜松で師範学校（後に中学校）の教頭とな

つた。時に十九歳であつた。四年限その職に就いて多少のゆとりを得た保は、学問修行のためその職を辞して慶応義塾に入って英語を学び、業を終えた。保は猶進んで英語を窮めたい志を持っていたが、貯も尽き、遂に「給を奉銭に仰がざるを得なくなつた」。その後の保は、愛知県で二十五歳にして中学校の校長になつたり、上京して慶応義塾の教師になつたりしたが、後に雑誌や新聞に評論を書いているうちに、専ら文筆者として生業を立て晩年に及んだ。著作翻訳は百五十部程の多きに至っている。しかし、鷗外は、保の生涯を要約している、

「其の書は随時世人を啓発した功はあるにしても、概皆時尚を追ふ書店の誅求に依りて筆を走らせたものである。保さんの精力は徒費せられたと謂はざるを得ない」と。保は大成しなかつたかも知れない。しかし、「生とはすべて、自己実現のための戦いであり、努力である」（オルテガ『大衆の反逆』）とすれば、彼は、武士としてまた抽斎の嗣子としての特権がすべて奪われて、はじめて真正の生を生きただのだ。だからこそ、保は、時代の混乱した始まりを生きだした新しい青年の典型として読む者の胸を打つ。たとえ、その生涯に、「世味の甚辛酸に、運命の転黯然たるを思はしむる處」（永井荷風『隠居のこと』）があつたとしても。